

多面的・多角的に考え
思いやりの心を育てる道徳の授業づくり
～思考ツールの活用と交流場面の工夫を通して～

豊見城市立伊良波小学校教諭 徳村清乃

I テーマ設定の理由

近年、グローバル化や科学技術等の進展により、価値観の多様化や人間関係の希薄化をもたらしている。また、物事の捉え方や考え方も様々である社会において、人々が共通理解を図ることは難しくなっている。

このような状況を踏まえ小学校学習指導要領解説総則編において、「これからの学校には、急速な社会の変化の中で、一人一人の児童が自分の良さや可能性を認識できる自己肯定感を育むなど、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる」と示されている。また、小学校学習指導要領解説特別の教科道徳編（以下『解説道徳編』と表す）では、「一人一人が高い倫理観をもち、多様な価値観の存在を認識しつつ、自ら感じ、考え、他者と対話し協働しながら、よりよい方向を目指す資質・能力を備えることがこれまで以上に重要」と示されている。これらのことから、これからの道徳は、一人一人の児童が自分の考えを表現し、多面的・多角的に考え、他者との交流でお互いを認め合い、思いやりの心を育てる授業が大切であると考ええる。

これまでの指導を振り返ると、思いはあるがうまく言葉で表現できない児童の考えを引き出すことができず、発言が一部の児童に偏ってしまっていた。色々な手立てを試みたものの、なかなかうまくいかず、発言をする児童の考えだけで授業を進めていたため、多様な考えにふれられず、児童の考えを深めることができなかった。また、交流場面では、自分の考えを伝える児童の姿は見られるが、考えをただ伝え合うだけで終わってしまっていた。友達の考えを聞いてあいづちをうったり、友達の考えの良さを見つけ認めたりする様子はあまり見られず、振り返りでも、友達の考えを聞いて自分の考えが深まった児童は少なかった。

そこで、これらの課題を解決するため本研究では、思考ツールの活用と交流場面の工夫を行う。自分の考えをうまく言葉で表現できない児童も思考ツールの活用を行うことで、自分の考えを表現できる手立ての1つになる。そうすることで、自分の考えを友達に伝え、様々な考えにふれることができ、道徳的課題について多面的・多角的な視点から考えることができるだろう。また、多様な考えにふれながらお互いを認め合い、思いやりの心を育てるために交流場面の工夫を行う。自分の考えをただ伝え合うだけの交流場面ではなく、友達の考えの良さを見つけ合い、対話し、自分の考えを深める交流場面になるよう工夫を行う。一人一人の児童が自分の良さや可能性を認識し、お互いに認め合うことができれば、急速な社会の変化の中でも他者と尊重し合いながら生きるための選択肢が増え、最良の選択ができるであろうと考える。

以上のことから思考ツールを活用して、一人一人の児童が自分の考えを表現し、他者との交流の場でお互いの考えを交流し、認め合えば、多面的・多角的に考えることができ、思いやりの心が育つであろうと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説と検証計画

1 研究仮説

思考ツールを活用して、一人一人の児童が自分の考えを表現し、他者との交流の場でお互いの考えを交流し、認め合えば、多面的・多角的に考えることができ、思いやりの心が育つであろう。

2 目指す児童像

(1) 多面的・多角的に考える子

- ① 自分の考えを表現している
- ② 友達の考えから何かに気づいたり、良さを見つけたりしている
- ③ 交流の場で次の3つの視点を意識して話し合っている（考えの同じところはどこか・考えのちがうところはどこか・友達の考えを聞いて、気づいたことはあるか）
- ④ 振り返りにおいて、授業での気づきや友達の考えもふまえながら今後の自分について考えている

(2) 思いやりのある子

- ① 相手の立場に立って考えている（役割取得のできる子）
- ② 交流の場で、あいづちをうっている・話し手に体を向けている・友達の考えに共感したり認めたりしている・友達の考えの良さを見つけている

3 検証計画

事前アンケート調査や役割取得検査、事前授業などを通して、児童の実態調査・分析・把握を行う。検証授業では、思考ツールの活用と交流場面の工夫を通して、一人一人の児童が自分の考えを表現し、多面的・多角的に考え、思いやりの心が育まれたかを、授業の様子や児童の発言、交流場面の様子、ワークシートの記述や振り返り等から考察する。検証授業終了後に事後アンケート、役割取得検査を実施、事前調査との比較・分析を行い本研究の仮説を検証していく。

検証授業の対象：豊見城市立伊良波小学校 4年2組 計31名			主な検証方法
1 事前調査	・アンケート ・事前授業4/15 5校時 ・役割取得検査		・事前授業の分析 ・役割取得検査の分析 ・事前アンケートの分析
2 検証授業	日程 〇内は授業で使用了思考ツール ※は他学級で実施	検証の観点	・授業観察（発言・態度等） ・ワークシート（記述・振り返り）
	① 4/28 5校時 4-2（ウェビング） ② 5/13 3校時 4-2（スケール） ③ 5/25 2校時 4-2（Yチャート） ※ 6/16 3校時 4-1 ④ 6/17 5校時 4-2（スケール） ※ 6/20 3校時 4-3 ⑤ 6/24 5校時 4-2（Yチャート） 【本検証 内容項目：親切、思いやり】	思考ツールの活用と交流場面の工夫を通して、一人一人の児童が自分の考えを表現し、多面的・多角的に考え、思いやりの心が育まれたか。	
3 事後調査	・アンケート ・役割取得検査		・役割取得検査の分析 ・事後アンケートの分析 ・授業観察の分析 ・ワークシートの分析
4 まとめ	思考ツールの活用と交流場面の工夫を行うことは、一人一人の児童が自分の考えを表現し、多面的・多角的に考え、思いやりの心を育てることに有効だったか。		・結果のまとめ、考察

Ⅲ 研究内容

1 多面的・多角的に考え、思いやりの心を育てる道徳の授業づくりについて

(1) 多面的・多角的に考えるとは

「多面的・多角的に考える」ことについて西野（2016）は、『多面的・多角的』は一続きで捉えるべきですが、あえて区別してみると、『多面的』は、物事の多様な面を、『多角的』は、それを見る側の多様な視点を強調しています。『多面的・多角的に考える』とは、多様な視点で物事のさまざまな面を見ることです」と述べている。また、解説道徳編では、「物事を多面的・多角的に考える指導のためには、物事を一面的に捉えるのではなく、児童自らが道徳的価値の理解を基に考え、様々な視点から物事を理解し、主体的に学習に取り組む事ができるようにすることが大切である」と述べている。これらのことから本研究では、「多面的・多角的に考える」とは、「多様な視点で物事を捉えること」とする（図1）。本研究では授業での姿やワークシートから見える「多面的・多角的に考える」児童の姿とは、「①自分の考えを表現している②友達考えから何かに気づいたり、良さを見つかったりしている③交流の場で次の3つの視点を意識して話し合っている（考えの同じところはどこか・考えのちがうところはどこか・友達の考えを聞いて、気づいたことはあるか）④振り返りにおいて、授業での気づきや友達の考えもふまえながら今後の自分について考えている」など自分一人の考えだけではなく、多様な視点で物事を捉えている姿が見られたら、「多面的・多角的に考える」力が育っていると捉える。

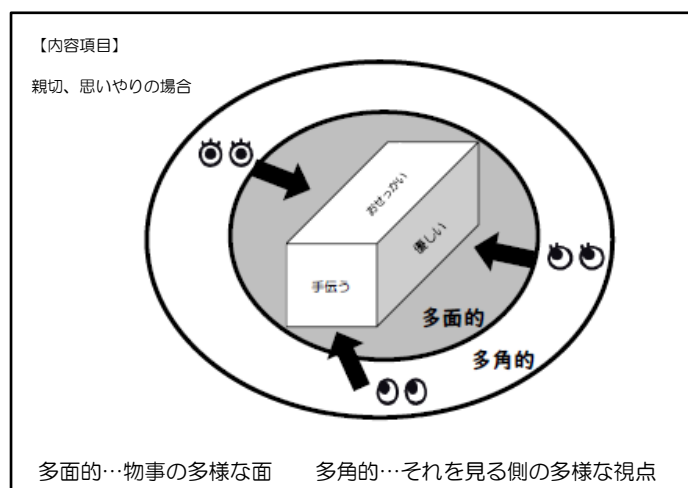


図1 多面的・多角的を表現した図

（2）思いやりの心（役割取得能力）とは

伊藤（1998）は、思いやりについて「相手の心（気持ち）をおしはかりながら、共感的に心を通わせること」と示している。また、セルマンは思いやりの心を「相手の気持ちを推測し、理解する能力」とし、このことを「役割取得能力」と提唱している。セルマンは役割取得能力の発達段階が幼児期から青年期までを通して、段階OAから段階4までであることを明らかにしている（表1）。この発達段階を調べるために、役割取得検査がある。

表1 役割取得能力の発達段階

発達段階	内容
自己中心的な視点 （段階OA）	他人の表面的な感情や表情は理解するが、自分の感情と混同することが多い。同じ状況にいても、他の人と自分とは違った見方をすることがあることに気がつかない。
自己中心的な視点 （段階OB）	泣く、笑うなどはっきりとした手がかりがあると、相手の気持ちを判断することができる。しかし心の奥にある本当の気持ちにまで考えが及ばない。
主観的役割取得 （段階1）	与えられた情報や状況がちがうと、それぞれ違った感情を持ち、異なった考え方を持つことは分かるが、他の人の立場に立って考えることができない。
自己内省的役割取得 （段階2）	自己の考えや感情を内省できる。他の人が自分の思考や感情をどう思っているかを予測できる。
相互的役割取得 （段階3）	第三者の視点を想定できる。人間はお互いの考えや感情を考慮して行動していることに気がつく。
社会及び慣習のシステムの役割取得 （段階4）	相互的なものの見方をとることは判るが常にそれが完全な理解に向かうのではないことも知っている。

このことから、本研究において「思いやりの心」とは、「相手の立場に立って、考えること」と捉える。これらを見取るために、役割取得検査で児童の発達段階を事前と事後で変容をみる。また、授業での姿やワークシートの記述からも分析を行う。本研究では授業での姿からみえる「思いやりの心」とは、「①あいづちをうっている②話し手に体を向けている③友達の考えに共感したり認めたりしている④友達の考えの良さを見つけている」などの相手の立場に立って考えている姿が見られたら、「思いやりの心」が育っていると捉える。また、ワークシートの記述において、友達の考えの良さを見つけ今後の自分の行動に活かしていきたいという内容や、友達の考えのどんなところが良かったかを書いている内容なども、相手の立場に立って考えている姿であるため、「思いやりの心」が育っていると捉える。

2 思考ツールの活用と交流場面の工夫について

(1) 思考ツールの活用とは

諸富・土田（2020）は、主人公の複雑な気持ちや葛藤を文章で表現することが難しい児童のために、視覚的に主人公の気持ちや葛藤を表現することができる思考ツールを考えた。思考ツールとは、物事の度合いを数値化するスケールや、物事を短い言葉でつなげ関連づけて考えることができるウェビング、3つの視点から考えることができるYチャート等、思考や気持ちを表現するものである。

諸富・土田（2020）は「自分の気持ちを言葉ではなく、視覚的に表すことができ、一目で考えが分かるので友達と比べて理由を話し合う時にも活用できる」と述べている。また、細川・北川（2018）は、思考ツールの効果について「①情報を整理し、思考を支援する②思考のふり返りを容易にする③他者との学び合いを生む④教師の評価の資料となる」の4つを述べている。

このことから、文章で表現することが苦手な児童でも思考ツールを活用することで、自分の考えを表現できるのではないかと考える。また、それぞれの思考ツールの良さを授業内容によって使い分けることで、自分の考えを表現でき、交流場面において考えを共有し多面的・多角的に考えることができる児童の姿が期待される。

(2) 交流場面の設定

解説道徳編において、「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うためには、児童が多様な感じ方や考え方に接することが大切であり、児童が多様な価値観の存在を前提にして、他者と対話したり協働したりしながら、物事を多面的・多角的に考えることが求められる。」と示されている。また、赤堀（2017）は、「自分の考え方、感じ方の他にも、多様な感じ方、考え方があることを知り、それらと自分の考え方、感じ方を比較したり、検討したりすることによって、道徳的価値についての自分の考え方、感じ方の良さや課題を把握することができるのです。そして、このことが人間としての生き方についての考えを深めることにつながるとともに、よりよく生きようとする意欲や態度を形成することになります。このような深い学びに必要なことは、多様な考え方、感じ方に出会うことであり、そのためにも対話的な学びが必要になるのです。」と述べている。このことから、思考を深めるためには交流場面が必要であり、他者の考え方や感じ方を聞くことで自分自身の選択肢の幅が広がり、多面的・多角的に考える児童が育つと考えられる。

(3) 交流場面の工夫

本研究では、全員が参加でき視覚的に分かりやすく、板書での活用もできるホワイトボードを使用する。その際、交流場面の工夫として2つの支援を取り入れる。

一つ目の支援として交流で何を話すか児童が把握できるよう、事前に3つの視点を設定する。「考えの同じところはどこか」「考えのちがうところはどこか」「友達の考えを聞いて、気づいたことはあるか」の3点について交流する（図2）。



図2 3つの視点を取り入れた
ホワイトボードのレイアウト図

二つ目の支援は、交流が活発になるよう「質問カード」を使用する。これまでの実践では、交流場面を取り入れたときお互いの考えをただ伝え合うだけの交流になってしまっていた。そのため、対話の促進の手立ての一つとして、「質問カード」を配付し、相手の考えに対して質問し、考えを深めることができるようにする。質問カードの内容は、岩瀬・ちょん（2011）を参考に作成する（図3）。これらのことから、交流場面においてホワイトボードを使用することで、自分の考えと友達の考えを同時に確認することができ、他者の考え方や感じ方を聞くことでお互いの考えの良さを見つけたり、認め合ったりすることにつながり、思いやりの心も育つであろうと考える。

- | | |
|---|--------------|
| ①〇〇ってどういうこと？ | ②どんなかんじ？ |
| ③もう少し詳しく教えて | ④たとえば？ |
| ⑤具体的にどんなかんじ？ | ⑥どんなイメージ？ |
| ⑦ほかには？ | ⑧あなたならどうしたい？ |
| ⑨どうなったらいいと思う？ | ⑩どれが一番いいと思う？ |
| ⑪（もし考えが同じだったら）
わたしたちの考えの同じところはどこかな？ | |
| ⑫（もし考えがちがうときは）
わたしたちの考えのちがうところはどこかな？ | |

図3 質問カード（筆者作成）

IV 検証授業

- 1 主題名 思いやりとは B 親切、思いやり
- 2 教材名 『『思いやり』って』（光村図書）
- 3 ねらい 相手の気持ちを推し量り、適切な心配りをする事の大切さに気づき、進んで親切にしようとする判断力を育てる。

4 主題設定の理由

(1) ねらいとする道徳的価値

思いやりとは、相手の気持ちや立場を自分のことに置き換えて推し量り、相手に対してよかれと思う気持ちを相手に向けることである。そのためには、相手の存在を受け入れ、相手の良さを見いだそうとする姿勢が求められる。この思いやりは、「適切さ」が足りなければ「冷たい」、度が過ぎると「おせっかい」になる。具体的には、相手の立場を考えたり相手の気持ちを想像したりすることを通して励ましや援助をすることである。また、単に手を差し伸べるだけでなく、時には相手のことを考えて温かく見守ることも親切な行為としての表れである。そこで、本当の思いやりとはどういうことかをよく考え、その上で自ら進んで親切にしようとする心情を育てることが大切である。

(2) 児童観

本学級の児童は、自分の考えを人前で発表することに苦手意識を感じている児童が多い。また、「親切にされた経験や親切にした経験はありますか」と聞いたところ、「席をゆずってくれた」「誰かが困っていたら手伝いたい」という意見があり、これまでの児童自身の経験から友達に優しくし、困っている人には親切にしたいという意識はもっているように感じられる。しかし、相手が困っていても恥ずかしさなどからなかなか親切にできないことがあり、手伝うことや助けることだけが親切だと捉えている児童が多く、多様な思いやりについて理解するまでには至っていない。

(3) 資料観

「わたし」は、腕の骨を折った夏実を助け、夏実もお礼を言う。腕が治ってきて、「わたし」は、自分でやろうとしてもうまくできない夏実を助けるが、夏実は、自分でやりたいと考えていて悲しい顔をする。数日後、「わたし」は、手伝ってほしいかどうか夏実に聞き、自分でやりたいと言う夏

実を見守る。困っている人に対して、「してあげる」という意識で親切にすることはありがちである。一回目の「親切・思いやり」の授業では、手伝うことが思いやりのある行動だということに気づいている。今回の授業では、手伝うことだけが思いやりのある行動ではなく、見守ることや相手の気持ちを考えることも思いやりのある行動だということに気づかせたい。そのために、これまでやってきた思いやりと相手の気持ちを考えた思いやりを比べることにより、多様な思いやりについて思考を深めさせることで、本資料のねらいとする価値に迫りたい。

5 本時の学習

(1) 検証の観点

思考ツールの活用と交流場面の工夫を通して、一人一人の児童が自分の考えを表現し、多面的・多角的に考え、思いやりの心が育まれたか。

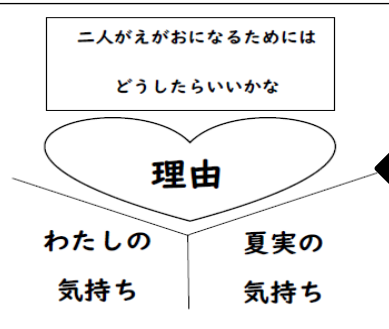
① 多面的・多角的に考える子

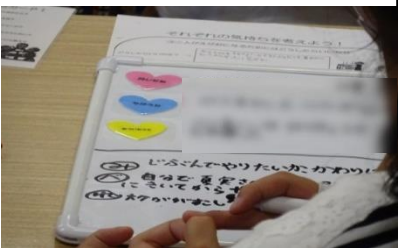
- ア 自分の考えを表現している
- イ 友達から何か気づいたり、良さをみつけたりしている
- ウ 交流の場で次の3つの視点を意識して話し合っている（考えの同じところはどこか・考えのちがうところはどこか・友達の考えを聞いて、気づいたことはあるか）
- エ 振り返りにおいて、授業での気づきや友達の考えもふまえながら今後の自分について考えている

② 思いやりのある子

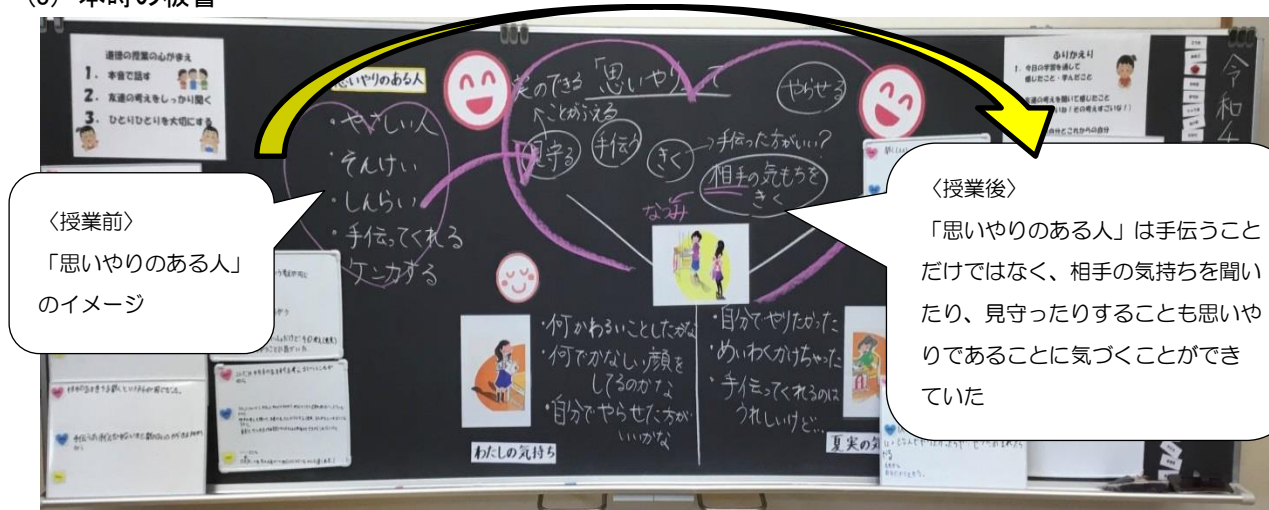
- ア 相手の立場に立って考えている（役割取得のできる子）
- イ 交流の場で、あいづちをうっている・話し手に体を向けている・友達の考えに共感したり認めたりしている・友達の考えの良さをみつけている

(2) 学習指導過程

段階	学習活動	予想される児童の反応	○指導上の留意点 ■授業仮説の検証◇本時の評価
導入	①「思いやりのある人はどのような人か」について考える。	- 誰かを助ける人。 - 困った人を手伝う人。 - 優しい人。	○「思いやり」について考え、価値への方向づけをする。
展開	②悲しい表情をしたときの夏実の気持ちを考える。【自考】  ③悲しそうな夏実の表情を見たときの「わたし」の気持ちを考える。【自考】 【全体交流】	・自分でやりたいな。 役割取得能力 段階1 二人がえがおになるためには どうしたらいいかな  ・もう手伝いたくない。 役割取得能力 段階2	■思考ツールの活用と交流場面の工夫を通して、一人一人の児童が自分の考えを表現し、多面的・多角的に考え、思いやりの心を育むことができていたか。 ○思考ツール（Yチャート）を活用し、自分の考えを書かせることで自分事として考えさせる。

	④二人が笑顔になるためには どうしたらいいかを考える 《中心発問》 【自考】 【グループ交流】  	・話し合う。 ・相手のことを考える。 役割取得能力 段階3 3人の考えの 同じところはどこかな？ 手伝うところと相手に 聞くところが同じだと思う。 何が大切かな？ 相手の気持ちを 考えることが大切かな。	○ホワイトボードを活用し、友達の考えの良さを見つけながら、多様な考えにふれさせる。 交流の3つの視点 ①共通点 ②相違点 ③気づいた点 
	【全体交流】 ⑤グループで話し合ったことを 全体場で共有する。 	「相手の気持ちを聞く」という 意見が同じだった。友達の考え とちがうところは「何も聞かずに、 相手にやらせた方がいい」という人もいた。	○グループの考えを発表させることで、全体場で共有することができ、児童一人一人の考えを深めることにつながる。
終末	⑥振り返りを書く。 振り返りの視点 1. 感じたこと。思ったこと。 2. 友達の考えを聞いて感じたこと。 3. 今までの自分とこれからの自分。 ⑦振り返りを発表する。 	・思いやりのある人は、相手の立場に立って考えることができる人。 ・助けるだけでなく、見守ることも思いやりなんだ。 自分が手伝いたいなら「やりたい」って言った方が良かったけど、お互いの気持ちを知ることも大切なんだなあと思いました。	◇誰かを助けることや教えることだけではなく、相手の立場に立って考えたり、見守ったりすることも思いやりであることに気づくことができたか。 ○振り返りを全体場で共有した後、友達の考えでよかったところや気づきがあれば、自分の考えに付け加え、さらに思考を深めさせる。

(3) 本時の板書



V 研究の結果と考察

1 多面的・多角的に考える子

(1) 自分の考えを表現している

図4は、検証授業で思考ツールに自分の考えを書くことができたかを割合で表した図である。第2時の授業以外は、全ての児童が自分の考えを表現することができていた。

検証授業では、「ウェビング」「スケール」「Yチャート」の3つの思考ツールを使った。

第1時の授業は「ウェビング」を使うことで、全ての児童が思いついた自分の気持ちをつなげ、その気持ちを可視化することができていた。また、自分の考えを整理し、思考を支援することができていた。

第2時・第4時の授業は「スケール」を使うことで、物事に対する自分の気持ちの度合いを表現することができていた。また、自分の気持ちを視覚的に表すことができ、一目で分かるため、友達の考えと比べて話し合うときに活用できていた。

第3時・本検証授業は「Yチャート」を使うことで、全ての児童が3つの視点（様々な立場）から多面的・多角的に問題場面について考えることができていた。本検証授業では、わたしの気持ちと夏実の気持ちを考えさせることで、中心発問に対する自分の考えを明確にすることができていた（資料1）。

授業後の感想では、「自分の考えをもつことが好きになった」「いろいろな考えをもつことができた」など、自分の考えをもつことに前向きに考える児童が増えた。

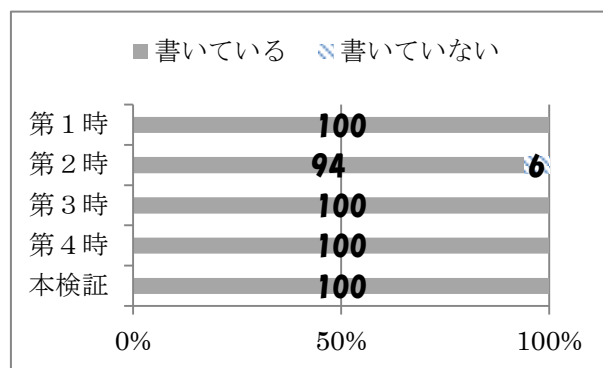
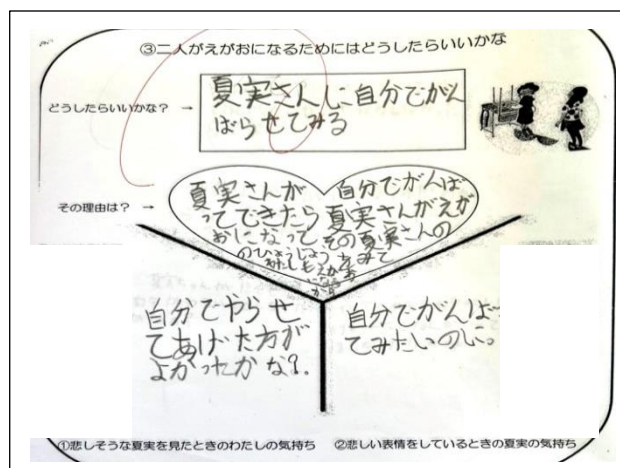


図4 自分の考えを書くことができた児童の割合



資料1 本検証授業で使用した思考ツール

このことから、文章で表現することが苦手な児童でも思考ツールを活用することで、自分の考えを表現することに有効であったと考えられる。

(2) 友達の考えから何かに気づいたり、良さを見つけたりしている

図5は、検証前と検証後の授業の振り返りの比較を示した。どちらもできている(何かに気づく、良さを見つける)児童が0%から48%になり、48ポイント増加、どちらかができている児童が18%から48%になり、30ポイント増加した。

本検証授業の振り返りには、「私はやりたかったら、やりたいて言っただけがいいと思っていただけ、お互いの気持ちを知ること大切だと思った」と、友達の考えから大切なことに気づく児童がいた。また、「〇〇さんは私とちがって、別の声のかけ方があっていいなと思った」と、自分と友達の考えのちがいを見つけたりするなど、思考が深まっている様子も見られた(資料2)。

このように5回の検証授業を通して、交流場面において友達の考えを聞き、納得する様子や考えの良さを振り返りに書く児童が増えた。また、他者の感じ方や考え方を聞くことで、自分自身の選択肢の幅が広がり、多面的・多角的に考える児童が増えたといえる。

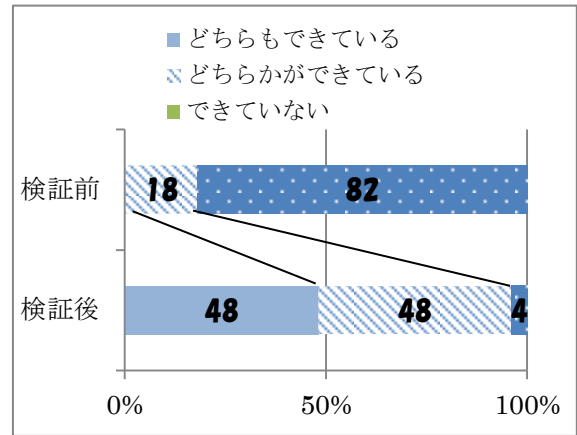
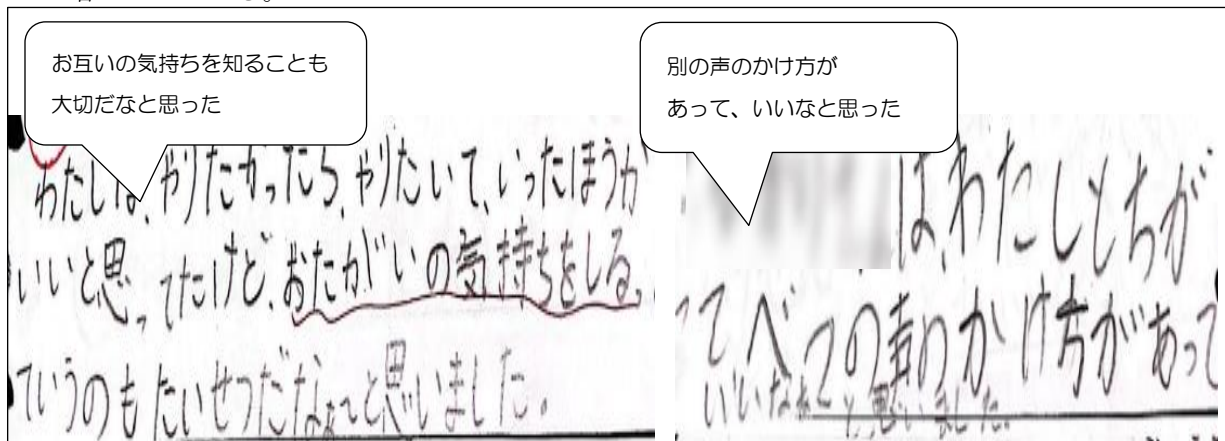


図5 友達の考えから何かに気づいたり、良さを見つけたりしている児童の割合



資料2 多面的・多角的に物事を捉えている児童の記述

(3) 交流の場で3つの視点を意識して話し合っている

本研究では、ホワイトボードを使用し、自分の考えと友達の考えを同時に確認することができるようにした。その時、考えをただ伝え合うだけの交流にならないよう、交流の仕方も工夫した。

第1時・第2時の学習では、中心発問に対する自分の考えをホワイトボードにそのまま写す児童がほとんどだったため、考えが深まる様子はあまり見られなかった。第3時の学習では、自分の考えをそのまま写すことがないよう、ワークシートに書いた自分の考えを貼らせた。その後、話し合いで気づいたことをホワイトボードにまとめる活動を取り入れたが、何も書いていないグループもあった。

これらの課題をふまえ、本検証授業では、交流で何を話すか児童が把握できるよう、事前に3つの視点(考えの同じところはどこか・考えのちがうところはどこか・友達の考えを聞いて、気づいたことはあるか)を設定した。あるグループのホワイトボードには、「考えが同じだった」「相手の考えを聞いて友達の言ったとおりにする人もいれば、友達にやらせたほうがいいと思う人もいた」

「〇〇さんの考えは、友達を心配してくれているからいいと思う」が書かれていた。また、質問カードを使うことで、相手に質問し、自分の考えを深めることができていた（写真1）。

このことから、3つの視点を設定したことで、友達の考えの良さを見つけたり、考えが深まったりするなど、多面的・多角的に考える児童の姿が見られた（写真2）。

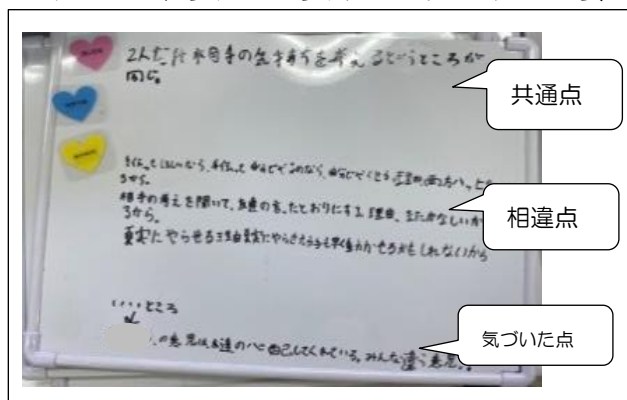


写真1 ホワイートボードの活用



写真2 3つの視点で交流している様子

(4) 振り返りにおいて、授業での気づきや友達の考えもふまえながら今後の自分について考えている

図6は、検証前と検証後の授業の振り返りの比較を示した。どちらもできている（授業での気づき・友達の考えをふまえる）児童が17%から64%に47ポイント増加、できていない児童が0%になった。

資料3は、5回目の検証授業の振り返りである。Aさんの振り返りには「友達の考えを聞いて思ったことは、友達のことを心配していてすごいなと思った。今までは何も聞かずに手伝っていたけど、これからはちゃんと友達の意見を聞いてから手伝いたい。」、Bさんの振り返りには「今までは自分が全部やってあげることが思いやりだと思っていたけど、これからは今までとはちがう思いやりの行動をいろいろな人にしてあげたい。」と記述されていた。

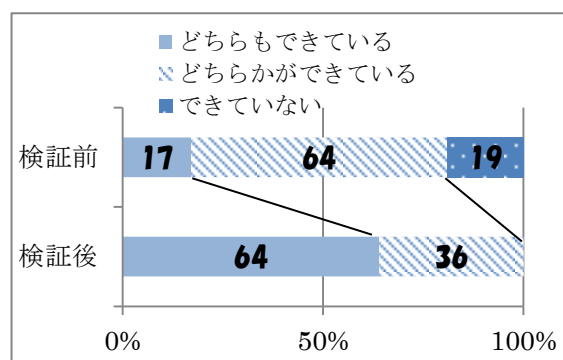
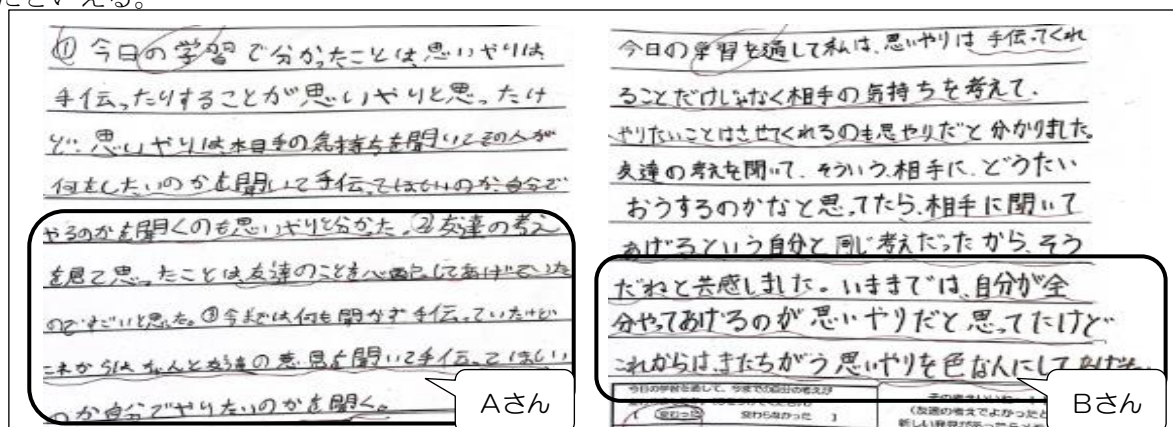


図6 授業での気づきや友達の考えもふまえながら今後の自分について考えている児童の割合

このことから、交流場面において、話し合う活動を取り入れたり、友達の考えの良さを見つけたりすることで、自分の考えだけではなく友達の考えもふまえながら、今後の自分について考える児童の姿が見られた。つまり、自分自身の選択肢の幅が広がり、多面的・多角的に考える児童が増えたといえる。



資料3 多面的・多角的に振り返りを書いている児童の記述

2 思いやりのある子

(1) 相手の立場に立って考えている（役割取得のできる子）

役割取得検査の結果から、段階OAの児童が25%から0%へ、段階OBの児童が25%から0%へ、段階1の児童が33%から25%へ、段階2の児童が13%から50%へ、段階3の児童が4%から25%へと変化した。役割取得能力を高めることができた（図7）。

1回目の検査では、段階OA・OBの児童が学級の半分を占めていたが、2回目の検査では、段階2の児童が学級の半分を占めた。

役割取得検査での回答を比較すると、事前検査では、自己中心的な視点で物事を捉えている児童が多く、相手の気持ちや第三者の視点で考えている児童は少なかった。しかし、検証授業を重ねていくうちに、多面的・多角的に考える児童が増え、周りの人の気持ちを考えたり、お互いが納得するような解決策を考えたりする児童が増えた。

このことから、交流場面においてお互いの考えの良さを見ついたり、認め合ったりすることは、児童の思いやりの心を育むことに有効であったと考えられる。

(2) 交流の場で、あいづちをうっている・話し手に体を向けている・友達の考えに共感したり認めた

りしている・友達の考えの良さを見つけている

検証前は、友達の考えに関心をもったり、友達の考えの良さを見ついたりする児童は約2割と少なかったが、本検証授業では、約8割の児童があいづちをうちながら友達の考えを聞いたり、友達の考えの良さを見ついたりする様子が見られた（写真3）。また、全ての児童が友達の意見を聞くときに、話し手の方へ体を向けている様子もあり、思いやりのある行動が見られた（写真4）。

授業後の感想には、「自分の意見に共感してくれるのでこんな意見でもいいんだと安心する」「自分の気持ちを素直に出すことができた」「ほめてくれて自分に自信がついた」などが書かれていて、授業内で周りの人から認められる機会が増えてきたことが分かる。これは、3つの視点を取り入れた交流場面を設定したり、思いやりの心を育てるための日常的な取組を行ってきたからだと考えられる。

授業以外でも日常的な取組を3つ行った。1つ目の取組は、日頃から相手の気持ちを考えるきっかけづくりとして道徳の授業に関連する本を用意した。命について考える本や、友達や家族について考える本、心の葛藤について考える本など、見たいときにいつでも手に取れるように「思いやりコーナー」を設けた。本を読むことに苦手意識を感じている児童もいたため、イラストが入っている本や絵本など、興味をもったときにすぐ読みたくなるような本を用意したことで、自分から進んで本を読む児童が多く見られた。

2つ目の取組は、「思いやりのあしあと」の掲示を行った。授業内だけでの気づきで終わらせる

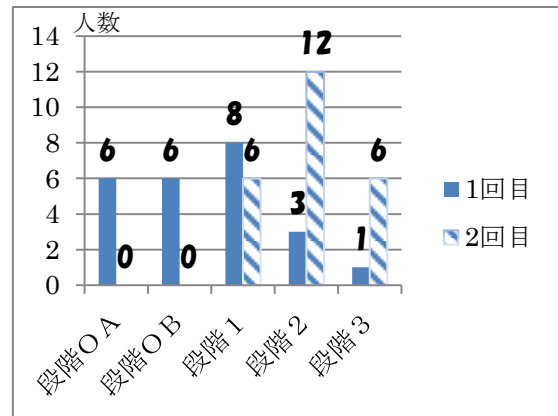


図7 役割取得検査の結果



写真3

友達の考えの良さを見つける様子



写真4

話し手に体を向けている様子

のではなく、振り返りを掲示することで、全体に共有することができる。共有することで、友達の考えの良さを見つけるきっかけになったり、授業では発言できなかった友達の考えを知り選択肢の幅が広がったりすることにつながった。

3つ目の取組は、「思いやりの木」の掲示を行った。学級で見つけた思いやりのある行動について、ハートの紙に書き、児童がいつでも目にふれられるところに掲示した。ハートの紙には、「〇〇さんが算数の時間に難しい問題の解き方を教えてくれた。」「困っていたときに友達が助けてくれた。」「私が落ち込んでいるときに〇〇さんがやさしく声をかけ、相談にのってくれたことがうれしかった。」など、身近にある思いやりのある行動について気づくことができていた。この掲示物を見ながら、「こんなこと思っていたんだ。うれしいな。」とつぶやく児童もいて、相手の良さに気づく姿と相手に認められて嬉しそうな表情が見られた（資料4）。

これらのことから、交流場面において他者の考え方や感じ方を聞くことでお互いの考えの良さを見つけたり、認め合ったりすることができた。

思いやりコーナー 	思いやりのあしあと 	思いやりの木 
 学級文庫に「思いやり」についての本を用意する。	 「思いやり」のあしあとを掲示し、児童の振り返りを共有する。	 学級で見つけた「思いやり」を見つけ掲示することで、お互いの自己肯定感を高める。

資料4 思いやりの心を育てるための取組

VI 研究の成果と課題

1 研究の成果

- (1) 思考ツールを活用することで、児童の考えを引き出すことができ、文章で表現することが苦手な児童でも自分の考えを表現することができた。
- (2) 交流場面において、話し合う活動を取り入れたり、3つの視点を設定したりすることで、友達の考えを取り入れ自分自身の選択肢の幅が広がり、多面的・多角的に考える児童が増えた。
- (3) 交流場面において他者の考え方や感じ方を聞くことでお互いの考えの良さを見つけたり、認め合ったりすることができた。

2 今後の課題

- (1) ねらいに迫る発問を構成し、思考を深めるためのゆさぶりの発問の工夫。
- (2) 日常的に思いやりに関する本の読み聞かせをしたり、学級の思いやりのある行動を探したりする活動など、道徳教育を核とした思いやりの心を育てるための計画的な取組の工夫。

〈主な参考文献〉

- | | | | |
|-----------|----------------------------------|--------|--------|
| 文部科学省 | 『小学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編』 | 東洋館出版社 | 2018 年 |
| 諸富祥彦・土田雄一 | 『考えるツール&議論するツールでつくる小学校道徳の新授業プラン』 | 明治図書 | 2020 年 |